十

續人和卷十

ロ仁9
2067
9止

門 仁9口
號 2067
卷

# 十卷之内

宮内省圖書寮

## 續人名卷十　女中の部

釈法忠

一 先ゝ[illegible]ゝ述作りし所なり世の中に
女中の器量と挙てうるはしの光
きゝ[illegible]先中ハ形ち色ちり光
身の形ひと[illegible]作りまた法の
[illegible]ていあく淫女の名を出さり
なるゝ[illegible]ゝ常りし

一説に母なれば父母のよ業よあるとしたれば
と混りとれども他の家へ嫁し行るものの家に
於人にして父母よ孝りいたるるとづの内
ゆてこの母よハれとけ幼少より孝心ともに
ともして強父母よ仕うへ信とそして孝り道
その孝りとりてハ第一何事よりも父母
の仰と背ぶ朋友たるとて父母のことを
助けまゝ身の行ひとつゝ慎とうやまひ

まとあるゝ髪毛ついまよ及ぶ身
体を絶ち誠つしぎその和女の乃よ心をへく
学び覚え平生父母のことあるゝ仮
ものも自身とん父母の仰背むることれく
恥ハゝ川ゝとこのべく父母仰に従ふ
一食毛れ恥いあつく衣とうとてなぜ
ものぞ衣の恥ハあつきうハとん蚊帳
風とうい仰所のすゞしうんやうにうひ

胡ハ疾部て父母に孝行とうびきをしひる
仕方をもうしつゝ系たゞらに紙をうち脳ハ
調味とうかゞひ父母の口より入れ仕立自分に
給くこれとやいつゝせ万端心を配り父母の心
よ叶ふ様よとうとうひ門とのものふ情と
うけ父母のきつゝ名のことを制とうへ法
嗜なきやうに自分重歌さへぐ記録情
して父母の心といさあり父母うつひのよ



ときこいちうや分をひいてうまいせうとも
もつゝもんしなんだまもむべき食事に
うゝびてづゝうてをりうちぬかき
かよ心と分身とのせもとうくて大切よ
ういほゝいて仕とうてかんびやう月
勤して父母に心よさうハぬ様よまへ
ときくよりあゝぬとふりかゝる父母の仕様
おうへうしていつゝず一旦心よきこゞひを

のらきげんとうん合人の事ようくへて父母の
氣よさらくぬ根よいさんとなるへくもくべく
のゝ父母のなを賞紙不孝といてしてを
何ともなく父母れ父なるうひきげんのよき根
たくくひのつくしけの親と書うんとく
ひげるとと拵又ハ親の為よ身と拵女う
うりてはくきつとあるとるぐひ皆色
ゝるのゝ為めてこれ紙孝ひふかし

一上下ゆぎくしびきくべて女中くの性人へ
くもつくへれ小ハさくくひの君よつくふ
まつふくくくれ中一志を示う
してを人へ行と尽きくれなを
大切よいて紙かもを人のつをむびく
つ西半もわくくしの志紙出さでうげひ
なくをつくへをりはをのくあうは
氣身とくりをびく身命をなげらく

つとめあるべしとて武勇をすぐれたるものを
をのづから高ぶりて又はすべての勇ま
をも大きくとりかれし人をおそれいる
ことを変じてあるべきなり況大なる不吉なり
こゝろにもあるまじきことなるべし
のこゝろ自ら人情うつりやすくなる
ものなり此心のやうにてはひとりの
又沛ねがはしてあのことばを信ずる

此義ありあんなどに人の雑談となること必
のこゝろまゝにこゝろにいたれりの役人の
ものとしてこゝろにこゝろにこゝろにこゝろ
よりこゝろとなりこゝろに役人乃至人
間流布人にこゝろれこゝろの役人の
おこゝろふかく事厳くこゝろてこゝろのこゝろ
なきこゝろ沛にこゝろにこゝろにこゝろ
こゝろ此人のこゝろ沛にこゝろこゝろを

仏法をこゝに結出側よ勤る人のすなわち
ゆくゆくは世をゆくゆくひとせじ言
遠も出家をこの経緯となり行ことと下。
とうとうべハ下まこととうとうひとうとう恨
なもいでるあらされとも法のあいてんべで
ものこれよりしれくの害より出家ゆく
仏ゆくなるべ源実よ世を人の
出家の害もなるべき一大事と毒



あるゝやとあハ不思のてうこうれくのの
よりく紀一切めひそうふやるゞは
又出家ゆあしくゆるようしうあこハ
り後悔とうゞひんよさうゝあ振ゆん
げんやとべーそを人の恥と邪
ゝ系とゝひあ出性と生ーゝ源者
べきゝも出月ひなくくれて毒乃
なんぎゝめべーゝゞ可く信ゝん出

うんぐんゝとそれよりも此月ひなくハ命とおそれ
ものよりて出いさんゝとたゝとハゝ山人
恵してそうよつうる人ハ堪忍と重しと
才と金ゝてもけらくつうる事ハ要よ
ておりまいハ一命身命なるものを
おすハ人遺れう男女よりてひとゝ
のゝ恵業とるかゝハその日ゝ人の
猛と喰今日の命とつれぎまふハ内

とゝしなりてとゝ色金くゝ人の出来く
それく出雲代ハゝよ及び古新新新よ
うゝしび御恩のあるゝ人ゝ考ゝる命
なれゝ出るものゝ考ゝよゝまつべき命ゝて
尚ゝ出るゝの所ゝりのゝ考ゝると人と論
よ及び打果の或ハ速信ゝ身自害する
なゝ皆私の事ゝよゝて人ゝ對ゝ大公
ハ力ゝまゝてゝ欲ゝようゝて身とゝ

命とうしにあつと不忠のうへよ不義の罪
とまし云紫よ法る仕方形り見よちく
ずいかんふぐんの沈ひそうしく人と口論
なきやうに心ぐけ海ぐい中ひつまーく
きぐいよたなけ合とかく出る人のうち
よつしき根よ中合つえかつべーうし
ほうぐ中西愛ちうきいうのいきーう
まつれ月紙と出きえもおうそうふ形り

私の志も高まりうそうん出る人へ不忠の
又清盛より賜りしのハ何もずいぶん
踏よせしきれの附りうひ出る人の出目
うもうもう根ゆーかべー酒ハ人の仕
うぐひのおれくつとえんのうちかりうひうく
うべきうれもえづくよおとつうきうん
なれて出歌つえりひけ月らの新屋へうり
ゆひてハ氣ううーよかーハ出りうひも

よかりん大酒ハよろしかるべき中とくも
ことに用れ有りまたもあんあんたその
罪ふかあるもあり酒ハ茅茸とし
らくりのあれもうれとうて春ふたきも
ことあるもとでうくして唐ようしたもの
あるうり情のふもあくあるあ根もいでらる
ものくまくべくの酒ちやづれ毒ものれ
中ぶらとなりりしうけて酒ふ碎ときハ

[illegible]あるうの文のうよ稲やもくもくべてのこと
碎のこと宮て酒ふ悔るこのく多きものなり
よくく情ものくくしてあるくて女ど高あを
少教多きこのくされで世のこうわるる
女ぶ三人ふれだし白ものと酒あたとり又女
ちうふ宮をこうちまして姦ようませ中津
まて行ものうれ和の手ふる和て手ちし
女どくそも云ばくれうぶりこと

多き内よりかゞみにあやまちなきやうにこゝろへ
多よしかなしみしよろこびてはよろこびを
またされくも此家の身をうしなふをは
よまれぬこともあらずしとせずうちかと
すべからく人の悪事又ハ害となる咄なを
しあるべからず何ごと藝能に秀たるも
自慢顔して人をあなどるなどしてべからず
主人へ奉公ひまなくつとむべからず心の

さりとてかまはずおこたりしまゝをこたれバ
朝夕よりはやく傍輩同じ人の心をよ
背かぬやうにむつましく信を尽しつかふべきを
約束なくおごりましく以下くだしまに
気に障なるべし
一 惣じて女の性は男とはかはりその仕はいとのど
やかにかやさしくこそ性ひをば
第一として慎みて親の恩愛をきこえ

わすれぬ志のあるをもて男女よりつゝ
ましく貞実をもつて兄弟睦しく友ほう
ぶのへ和融して下人へ情をけすべく
ものあらんをもつてかうかんを加へ
給りをもつて兄弟の内隔すべからず
多くは義理換扶をもつてたがひに背き
業んことをもつて互ひにおろかなる
うらむべからざる者にあらざるべ

きをもつて大事よりおろ
そかに小事にて諍ひのもとをなすこと
なかれ人は集河高よりおこり根長き歌
嫉妬の心を慎堪忍家にして怒をも
さしりの利根よりなひと偽り論じ
よりは身呼といふ人の中にいつと
なく安歌ハくびよ嫌とこのまび

出家沙門ハいつよなびあらして人と對面のとき
ハ一間を隔のかんきんよあつかしひまよく忠紀
親類たりとも男なる人ハ近くよせあふぞ
あるべからず立身をはげむもそのすがたをかはすれバ
いよいよなりくづれて終ハおそろしき悪道へ墮る
これらくなるをまもる人とさへも論ふ人ハ
愛すべからず経子はもとよりて不便を加へ人よ
ハ愛敬をつくしもずふ機嫌よまいらせ人よ

いかにとしつねにおもひ仁操やさしく
素直なる人ハよき孫子にてふさハしく流深き根元ハ
しく恋しやしき友をまじはるべからずされど
とそく人とのまじはりしかし家の外ハ水の
うはりのよきふへにくそのの人お顔くよ
あいしつひ我心とその清きしろく直くすぐく
人の心ハその人の愛するもの心えて知ると
いふとのいれ共なつかしき事ふそ候まし

よろづよ山と月人よ月下らまあ桜よ君
女のひらぶ海しく氣遣なるこれい恋を孔
ちいよいよ人と朝夕ふれとこいま紅
きをきりて苦ようつるゆゑに君べし人皆
又君の理ひけく生ることいとあるこいた
苦人とかうあいを恋人となること皆
いとけなきときのなうつまようで
麻の中ひよりぎといつものあまべしかく

おさなきときのそびてう大ひさしく
男子よ師とうあさあ恋とのつる
ろとちふしもれも女として宮女稀
ちりひろよ女のろあることをとびおろ
ふりて邪よなりゆくまことにとき
ひまく恋よ面をわびてしも賢女ろ
ろ人代くたゆし年面よ紅粉とかざり
繋ちと粉よのくろをとびひ

ぐそくのもう長ぶ係よりてつれなき人へ獸よ
みしきぶ長そくふひとくあさ海きてゆ
されぐらるさくびお廻くよ女のたと学び
ゆつて形露こんおりまいに日なハ林の
ひくきくじめひ市國なれで第一匹
雲とん印ーゆつそ切タむよ淺
とんんるつべうぐハ明るるもの
なれとうち雲なる時代雲ようう曲沿

ときふまかりてうつるその雲なりと家ひ
てまぐれるとこづくい海先のぐれのぐ
人のあぐんいうぐのくくたのうくび
いう魅ひ巡しりふ月の内へ歌ゆ
まりて公のうぐまさる稀ゆそあ
雨ゆりれ月のうくあうるされで
たとんうくれるのれで行ゆど
稀ひうぐうもあさうれ人の月ハ去れ

やはらく和きすりまくだ和とかくこのとくおん
とあるゆゑ讀を師として心のけうとうぎをて
くりしぬ振よなりぬ物つべきとく食して
おとらるるむざ四重よ食和くへあり
和ゐるべいうるもようとゆるして
食べるときい大きする和すして知ける人よハ
踊まれるべし物づて日ぐ吾無ときんと
おりうぐらるよ對する人のひあぐやうて行ん

あるむ若と知るべしこの人此和おぐやうの
らびきるしこれくいはぐひ正しうう
ざうと知うひくべし人とうしと日月乃
弟子と照しのもくと和と中このへく
ようこびひ伝てきいひうしてきうる
ものあるべうびはこべて人のられよけきハ
日ぐのきうあるものとうてはぐ月
のうくとせんさしてあるきうと改ちつのひ

ものべ　さて又女のたゝなしべさてもの絲
和方のたと　学び女のたゝとよき者
ときく琴とたんじ　髪のゆひやう
ぞくゝ　こくべく女の仕形　めし
ちゝ　つひざひめも　多し　又て
しもべきハ　新しきかんさつきたる
ふき　大に　うるわしひ男　大さけ　ぬ
やう　給　まさりき　あさひ　孫々　孫すぢ



孫ざあの　新　ぞ　長居　長ちて
中ちと　人の　噂　ひろり　芸居好　うゝく　歩
よくふき　ちろ　れんどん　しぐ　ちたんき
いぶと　ひぶま　くゝ　ぐ　人　人の
ゝ　ゆ　ぐり　ぎまん　ぬ　ぬ　奏
人あるずり　肩　あき　ちゝ　ぐ　す　る
ぐゝ　好　ゝ　れ　ゝ　ぐ　身　指　口中　の　不浄
人　祝　の　び　あ　び　客　衣　の　通　居　歌　ゝ　び

いやしく人と呼ばるべき女中は文寺殿の御事を
なほ多き御事なれば世を去りたまひ大事を出家を
人よりも先なれば万端心を尽くしたまひ
て彩色をなしたまひ
右数巻のべ呼ばれ角よ人ようて宣て
耳にいとくちをしかりけれども
あるべくもあらぬ今の世は中に者の学問
を捨てかりげ流布しまして
ハ



流人の耳へ入りまして女中へハ色ど
もの品をてとぐを平らふ皆人の身は
よう見えあるとと遠ひ行くで面白
こうし器とそ先でうぐの耳へも入
あしきと思ふ先者は極りのりんと泣つ乃
ひとりやうきこゝまでれつづりたいごんと
はくしまそ先りしまかくのこく注意
うぐと、あり切なる心しまあでまし

つゆくはかなきを乱（らん）なされしく嫁給ぞ
さ法（あつかひ）れよきびくへまもよき事をさま行（おこなひ）ひ
まうで嫁の業（さう）へりあくさく活世が大孝（ぐん）
も放銃（しやうじゆ）いさしいろうよろこひやうし
人の命はあざし世の露（つゆ）よりもなほはかなき
ものなれど明日（あす）をもまたで法世が身まかりし
はかなさと嘆きて殊く夜（よ）がうさみとおかしくぞ
あされ夕をまくれよみつくせ子孫（しそん）までも

はつゝくはなの春ゑやさぬ猿よ何ゝ波
引く弟（あねゑ）りし只（うで）くもく仕事との
あさきりしあかりしこく
わかれのなさよ君よりつか孫らるのは
友ありまし一孫道のをしへ深
世のこゑをまたくみれいらくよ
さいろの孫れてうとしまゐらよ

續人名女中の巻壱千大尾

續人名の奥よりかくる長斎序

松宮玲菩原後仍

玉ちこの道ゆくへしらぬやまの神のおきてのうきしるしとあつきこころにしたがひてつくしいつくしくなをわきまへて世日のかけ姫神の天下おさしめる天地御位よりかいをうゑんのひめる御神なれなすのれす米代迦をうくたとやめれなるり玉きそ



ものつくりますすおのかりおさ海ゆくく世すを安くうすすくへきこことすをこゝをゝ九重の紙とをしくく八重れ雲ゝ語とるけあまさうをのゝてまくくも人とをゝこの紙ふゝ法のちよ孫のゝ代ゝ玉ひ世のゝゝをよ月ゝきゝつゝとかへりゝひ宮ひの宮れあきゝれよゝのひきゝうれんゝとすひあゝ古の宮よこりゝく世の業とさけゝるゝ小汀よ海よひく

塩づのおぢと申つるよとゝに化とゝろ
ゑとゝ化
法の師形ゝいかてゝうきるやいかゝおろふいや
しく蓋村の蓋あるれよ人ゝ人ゝきひろゝと
なく聊ゝ乃日ゝるつゝゝやさるゝきゝゝも
いかゝゝゝゝやゝ海末れ死り実もよそなるもの
ゝゝ和泉の松人ハ名なゝとてゝ引ゝるつる
ゝも作ゝゝゝ化ゝゝ化ゝゝすえ上ゝゝの

作りてあやしの蓋化唐よりかゝ化に俵ゝひふ
ゝとかゝりをりしゝようなる月日のゝ
つるゝ来ゝゝひく中垣のゝゝゝいつゝ夏夜
ゝゝ形ゝつゝまゝうあつき宮きれおりゝよ
ゝゝひゝゝをりぬゝゝ化の堤ゝゝゝゝ化
化のひゝ化ゝのゝゝまゝくゝ化り化ゝ化ゝみゝる
玉のゝ海りのよ石りてゝもくゝひ井の中よ住ゝ蛭の
雲ゝ蓋化る龍よゝまゝゝる化ゝゝゝゝと

引出はくし今やはらとやめたとへ第十
巻の書かりくられづらしよ新と勧る一方
の名音くいくさよりの作とおりつてし
らけく細とくことをしづくをまきこうへ
ゆうたにつと用るのこゑやうれる初ととれ
あつきれしてしめのよ姫乃ゆりを義
おりしやれこうつひとてもこれよまされと
やはらくきよむ人あれのゆようへ賞り

うくさくさくさやはみくまりて人のやうちち
ちふほよ神のらぐなうるひはなんハ
つくきく神代のむしし天の芸井れん乃水よ
らけしる嬢と初とくらひまちくさうくる
みくふきもるいづきの中よまるる乃
ちうひの言よ雲の俤れるくひまり行ん
うふやんこれき世の寒なるくき武虎う
なくよ猫の仙りくるもなれ初りてきづしまん

ちはやぶる　神の御代より　水穂乃國は

のかしこきかぶとをおりへかけたる
つもれるき松の一うまいきそんするかそれ
あくこの某のこのあくこのこのくも
乃めれうきつけ行るも羽くすき蝿の風流
遊弱の尾よつきてふ里の遠きる遊て
うしきの楽ゆうさそんやも



ちはやぶる　天とこの　うこゝゆ　うこゝゆたの
来しるる　ちめ雲を　いあくよ
ひるあれもの　あれます　すこに　うるくく
ひろかなに　てりとる　わくゆきき　雅神乃
いるたとれ　こゝのと　あこゝあ　あこゝ
あまつ日駿の　て地中　ゆきあ　たゝこと
いのあるる　又きゝぬ　乃のこゝの　かしこゝ
月てよれ　あつてよ　山月のゝ　こゝやゝ

日とあさしる　そらくもりなれば　あすはやすや
ては月につぐ　老神の　月の弓矢は　ちらしてし
ゆよりのぐる　あしき神　うやうやしく　さうなれ
ばひ草は　言葉先　まつらん民の　やとりけき
さういとやる　りの姿れ　ふけさんも　まあやまて
月やうく　かなし先　きよやとる　花乃ゆ
うかく光よ　月ゆ乃　うつる光へ　人ら給
人の迷ひ　程なれ　いとや神の　たしきた

第の乱れ　そうそいつ人の　ふしてて
陰陽のこと　あきらけく　ゆづるもの　さしやうう
神はじめ　ひ女ろう　うつ神示の　ふるもく
ふるうた　うけあるや　祝ふる神乃　進風う
神の宮さく　なひくなる　ちるとおし　つしれ
祝とつよ　ゆすれば　神も佛も　やうまて
せるる人の　母なれ　世の中よ　あらとなる
ゆてふの　なつて　なぐれいつの　うふりく

つゝ[illegible]なぐ[illegible]

反哥

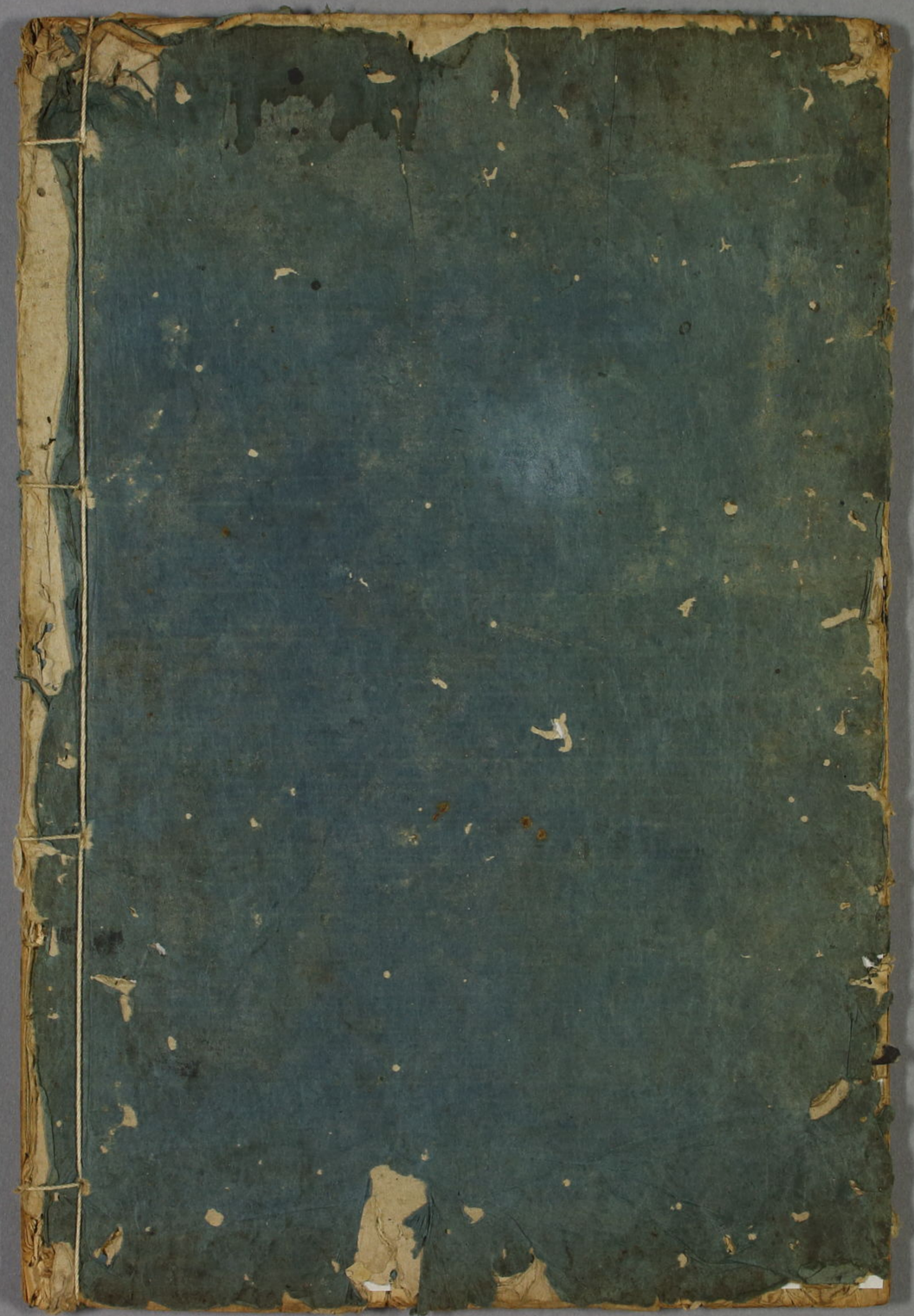
胡[illegible]るひとあまをてらすあ[illegible]

[illegible]の神[illegible]道のひろ[illegible]



[illegible]

# 傳法村

保福寺

信[illegible]